

第2回

研究戦略としてのケース・スタディ

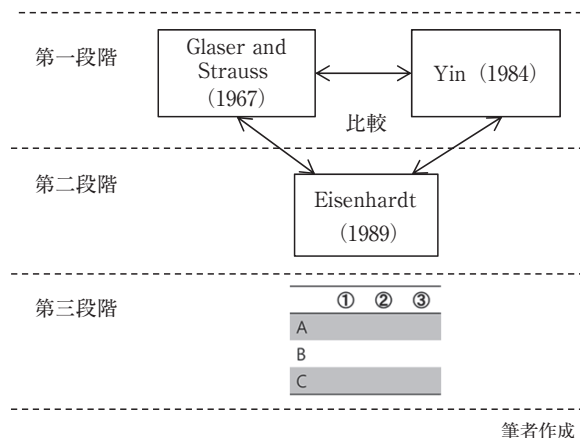
―実地調査前に理論は必要か―

横 澤 公 道

1. シリーズの構成

本シリーズは、経営学において代表的な定性研究方法である三つのアプローチ：Glaser and Strauss (1967), Yin (1984), そしてEisenhardt (1989) を比較することでケース・スタディ研究戦略を深く理解しようと試みるものです。まず今回以降のシリーズの大きな構成を説明します。シリーズの第一段階として、どちらもケースを扱う定性研究方法でありながら方法論的手順が大きく異なるGlaser and Strauss (1967) とYin (1984) を紹介し比較していきます。次に第二段階としてこれら二つのアプローチを基に開発されたEisenhardt (1989) を紹介し、他の二つのアプローチと比較します。第三段階では、この三つのアプローチの相違点をまとめ、最後にどういった研究者がどのアプローチを選べばいいのか検討していきます（図1を参照）。

図1：シリーズの構成



2. 比較分析について

Glaser and Strauss (1967), Yin (1984), Eisenhardt (1989) は、ケースや定性データを主に扱うという点では一致していますが、手順等が大きく異なります。今回、以下の6つのポイントからこれらのアプローチを比較していきます。

比較ポイント

-
1. 学術的背景
 2. データ収集前の文献調査と先行理論の必要性
 3. ケースの選択
 4. データ収集と分析
 5. 実地調査を終了させる時期
 6. 研究の質の判断基準
-

まず、両者のアプローチに影響を与えていると考えられる学術的背景を比較します。第二に、データを収集する前に既存文献調査を行うか、また理論を準備して実地調査にはいるかという点を比較します。第三に、ケースを選ぶためのロジックの違いについて説明します。第四に、どのようなデータをどのように収集し分析していくのかを解説していきます。第五に、どれくらいケースの数が必要かということです。最後に、研究の質をどのような基準で測るのかというポイントについて比べていきます。

本稿では、Glaser and Strauss (1967) と Yin (1984) の二つのアプローチを比較していきますが、まずは両著者の学術的な背景をみていくことにしましょう。実はこの背景の違いが、二つのアプローチに大きな影響を与えていると考えられるのです。

3. 学術的背景の比較

3.1 バーニー G. グレーザーとアンセルム L. ストラウス

Anselm L. Strauss (1916 - 1996) は、シカゴ大学においてPhDを取得し、様々な教職を経て、1950年代にカルフォルニア大学（サンフランシスコ校）で看護学のPhDプログラムを開設するにあたり^{しょうへい}招聘されました。着任して間もなく申請した死と死の過程に関する研究への助成金が採択されます。時を同じくして、コロンビア大学のドクターコースを修了したBarney G. Glaser (1930 -) は、共同研究者としてこのプロジェクトに参加することになります。今となっては定性研究の代名詞となっているGlaserですが、当時は定量調査の専門性を買われてチームに貢献することが期待されておりました (Charmaz, 2006)。二人を中心とする研究チームは、カルフォルニア州の病院で終末期医療について調査を行い、その結果を著書*Awareness of Dying* (1965)¹にまとめております。

調査が行われた1960年代初頭の米国では、終末期患者に対して医療スタッフや家族が、死が間近に迫っている事実を告知することは一般的ではありませんでした。そんな時代に、調査チームは患者や患者にかかわる人達（医療スタッフ、家族など）が患者の死をいつ、どのように受

¹ 日本語訳：『死のアウェアネス理論と看護—死の認識と終末期ケア（1988）』

け入れていくのか調査したのです。そこから明らかになったのは、患者と患者に関係する人々の以下の4つの「死への認識」です。

1. 医療スタッフや関係者は患者に間近に迫った死を知りつつお互い協力し合い、患者に伝えないようにする「閉鎖認識」。患者が疑念を抱くのを避けるために、スタッフは患者に対して情報を断片的に出したり、時にはあえて誤った情報を伝えたりする。
2. 患者が自分ではもしかしたら死ぬのではないかと疑念を抱き、医療スタッフに対して真実を確かめようとする。一方、関係者はそれを否定したり、取り合わなかったりする「疑念認識」。
3. 患者の死がもはや避けられないことを本人も関係者も知っているのに、お互いに知らないふりをする「相互虚偽認識」。患者と関係者は、この状態に心地よさを覚え、このはかない幻影を維持しようとする。病状が悪化した、または患者が死を一人で受け入れられなくなった時に次の段階に移行する。
4. 死はもはや避けられないことを患者と関係者の双方が認識し、その事実を受け入れる「開放認識」。どのように、そしていつ死を迎えるかといった情報は、患者が死を受け入れることができるかと判断したときのみ伝えられる。

二人がこの研究を始めたのは、Straussは母親と友人を、Glaserは父親を亡くした直後であったといえます。この研究テーマは自分自身の問題でもあったことでしょう。*Awareness of Dying* (1965) は、患者の関係者が死を間近に迎える患者に対してどの段階でどのような情報をどこまで開示するべきかを考えるにあたり、多くの示唆を与え続ける著書となっております。

同調査から見出した方法論であると同時に、筆者らが感じた既存の方法論の疑問に答えるために執筆したのが*The Discovery of Grounded Theory* (1967)²です。当時、社会学は理論実証研究が主流で、理論構築研究が二次的になってしまっていることに問題を同著で提起しました。理論実証研究は、科学的厳密性を重視している一方で、既存理論から仮説を演繹するため、既存文献が少ない分野では仮説が実務的課題とずれてしまうという問題がありました。しかも当時の理論構築調査方法はデータ収集・分析・理論構築のプロセスはブラックボックス化してしまっており、そこから出てくる調査の成果物は妥当性・信頼性が担保されていないただの「アネクドット（逸話）」であると批判されていた時期でもありました。これに対しGlaser and Strauss (1967) は、現場で収集したデータから理論を産出することで、実際に使える新しい理論を発見することができるとし、同著の中で帰納的理論構築研究の重要性を強調したのです。また理論構築調査の方法論的原則と手続きを明らかにし、さらに調査結果の妥当性をどう確保するかを考察しました。この研究戦略は、「データに根差した理論 (Grounded Theory)」を発見するアプローチであることから、グラウンデッドセオリーアプローチと名付けられ、以降、理論構築のためのひとつの研究戦略として多くの社会学者に注目されていくのです。

3.2 ロバート K. イン

Robert K. Yinは、ハーバードカレッジにおいて歴史学の学士を首席で卒業し、マサチューセッツ工科大学 (MIT) の心理学科で脳と認知科学 (実験心理学) の研究でPhDを取得しました (Yin,

² 日本語訳：『データ対話型理論の発見―調査からいかに理論をうみだすか (1996)』

2013)。大学院在籍時代に執筆した初期の論文に、顔認識に関する論文Yin (1969) やYin (1970) があります。

その後、MITの都市研究と計画学科において助教授として籍を置きながら、1970年から米国シンクタンクのランド研究所でシニア研究員として働き始めます。そこでYinは、研究分野を実験心理学から公共政策へと移行させていくことになります。この頃に執筆したYin (1972) では、公共政策研究では頻繁に使われてきた伝統的な研究方法である参与観察の問題点を指摘した上で、自分の考えを修正版参与観察として提案し実行するなど、このころから方法論への強い関心を見て取ることができます。

Yinがケース・スタディについて初めて執筆した論文にYin and Heald (1975) があります。この論文で、公共政策分野におけるケース・スタディを使った文献は、読者に多くの洞察を与えるという利点を認めながらも、調査結果は一般性を欠くとし、より外部妥当性や再現可能性を担保できるケース・サーベイメソッドを提案しております。このメソッドは、要するにメタケース分析のことで、類似したリサーチクエスションを扱ったケースから得られたデータを高次で集計分析するというものです。ここにおいても、既存のケース・スタディにより科学的厳密さを追求する姿勢を読み取ることができるのです。

1978年、ランド研究所を退社したYinは、MITに在籍しながら1980年にケース・スタディ研究所を米ワシントンD.C.に立ち上げ、独立研究コンサルタントとして他の研究機関と共同でプロジェクトに関わっておりました (Yin, 1981a)。その後、ケース・スタディ研究所に加えて、経営と技術研究所および小企業研究所を新たに立ち上げ、これら三つの研究所から組織するコスモス社を設立します。同社を立ち上げてからは、公共政策に関する論文 (i.e. Yin, 1981c; Yin & Gwaltney, 1981) を出版する傍ら、MITの都市研究と計画学科で客員准教授として「ケース・スタディのデザインと実行」という講座を担当し、ケース・スタディ研究戦略に関する二本の論文 (i.e. Yin, 1981a, 1981b) を出版しております。Yinは、ケース・スタディ研究戦略を開発し、それをコンサルタントとして実行に移すということを繰り返すことでケース・スタディ研究戦略に対する自らの考えを固めていくのです。そしてYinの代表作である*Case study research: design and methods* (1984)³を出版するに至ります。同著は、科学的実験の厳密性とロジックを定性研究法へと当てはめようと試みたところに最大の特徴があります。それまで定性研究法は再現性や一般化可能性などが弱く、ただの読み物として扱われていたのを、同著はそれを一気に科学へと地位を押し上げたのです。1984年の出版以来、何度も増版され、現在最新のものが第6版目にあたる*Case study research and application* (2018) です。

4. データ収集前の文献調査と先行理論の必要性

それでは、これから最初の比較ポイントである、研究を何から始めるかという点について比較していきます。実はGlaser and Strauss (1967) とYin (1984) のアプローチが大きく異なるのがこの点なのです。まずはGlaser and Strauss (1967) の主張を見ていくことにしましょう。

4.1 Glaser and Strauss：問題とリサーチクエスションの設定

仮説検証研究は、まず研究問題を設定し、その後研究領域を選択するのが一般的です。一方

³ 日本語訳：『ケース・スタディの方法 (2011)』。

で理論の発見を第一目的におくグラウンデッドセオリーアプローチは、絶対に「問題」から入ってはいけません。問題から入るということは、すでに理論を実証する方向に向かってしまっているからです。それを避けるためには、研究者が関心のある研究領域を設定する⁴ことから始め、その後、実地調査を進めていく中で問題が浮かび上がってくるのを待つのです。事前知識もなくいきなり実地調査に出て、研究問題が果たして見つかるのか不安になりそうなものですが Glaser (1978) は、心配する必要はないと断言します。ほとんどの場合、思った以上に早く問題は出現し研究者自身が驚くほどだと述べます。

同様にリサーチクエストも実地調査前には設定しません。Glaser (1992) は「(実地調査中に) 問題を発見できるという確信がないと、先入観をもってしまおうという強い欲求が生じる。しかし研究者はこの欲求と戦い、何も知らないようにすることを学ぶべきである…。 (p. 24)」と述べ、リサーチクエストは実地調査中にデータ収集と分析を繰り返すことにより自然に浮かび上がってくるものであり、データ収集の前に一切設定するべきではないということを繰り返し主張するのです。

4.2 理論から頭を開放せよ

Glaser and Strauss (1967) は、実地調査前に調査対象に関係する文献を読むと、研究者が既存理論に縛られてしまい、新しい理論を発見できなくなってしまうと述べます。そして研究者は、関連文献を読まず、むしろ頭を理論から解放した状態で実地調査を始めることで、新しい理論をデータから発見する能力を高められるといいます (Glaser & Strauss, 1967, pp. 37, 46-47, 253)。Glaser and Strauss (1967) は、この能力のことを理論的感受性 (Theoretical Sensitivity) と呼んでいます。

しかし、この主張は多くの批判にさらされることになります⁵。そもそも大学院生を含む研究者は、普段から多くの既存理論に触れており、頭を理論から解放することは現実的に不可能ではないかという批判です。それに対して Glaser は *Theoretical Sensitivity* (1978) および *Basics of Grounded Theory Analysis* (1992) を出版し、その中で文献の種類とそれらに触れてもよいタイミングについて補足を行います。

4.2.1 グラウンデッドセオリーアプローチにおける文献

Glaser (1992) は、グラウンデッドセオリーアプローチにおける文献を1) 研究の具体的領域に関係しない専門的な文献、2) 研究の具体的領域に関係する専門的な文献、3) 専門的ではない大衆向けの純粋なエスノグラフィック的記述、の三種類に分け、それを読むタイミングについて解説しております。これから調査のプロセスを実地調査前、実地調査中、実地調査後と三段階に分けた上で、段階ごとに読んでよい、または読むべきではない文献の種類について検討および解説します。

実地調査前から実地調査終盤にかけて

グラウンデッドセオリーアプローチにおいて、実地調査前に頭が理論や仮説に縛られた状態

⁴ 関心研究領域は、研究者がその研究を最後まで終わらせるだけのモチベーションがあるかという基準で選べるといいます。一方で、どの領域も深く入れば興味が湧くものだとも言っております。

⁵ この議論については Charmaz (2006, p. 165) を参照。

でデータ収集を始めると、無意識のうちに仮説を実証しようとしてしまったり、得られた情報を既存理論の枠組みに無理やり当てはめて考えてしまったりといった理論的感受性の汚染が起こってしまうといいます。しかしこれは、実地調査前の段階において、具体的領域に関係する文献を読んでしまった場合に起こることで、具体的領域とは関係の無い専門的な文献を読むことはむしろ推奨されております。これにより、理論的感受性が高められるのと同時に、先入観にとらわれずデータから自由に構成概念を産出できるのです。

しかしGlaser (1992) は、この「研究の具体的領域に関係の無い専門的な文献」について具体的領域がなにを指すのかあまり明確に説明していません。さらにGlaser (1992) において、実地調査前には具体的領域の文献は触れるなど主張しているその数ページ前では「(研究者は) どの分野かを問わず、具体理論、公式理論を常に読むべきである (p. 28)」といているように、同じ著書の中でも主張が一貫していないのです。

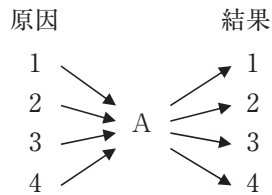
グラウンデッドセオリーアプローチのこうした曖昧さは、実地調査前の文献の役割について様々な解釈を生じさせる結果となります。よくある解釈の一つとして、グラウンデッドセオリーアプローチは、研究者が先行文献をまったく読まずにデータ収集を始めてよいというものです。こうした解釈に対してその後、多くの著名なグラウンデッドセオリストが異を唱えます。Suddaby (2006) は、これをよくある「誤解」だと切り捨てます。彼は、グラウンデッドセオリーアプローチにおいて、文献を読み先入観をもってしまうことの本当の危険性は、研究者が意識または無意識的に仮説の検証へと向かってしまうことであり、それをコントロールできるのであれば具体的領域の文献を読んでも問題はないと論じます。同様にSiggelkow (2007) も「偏見がない (Open mind) ことはよいが、まっさらな頭 (Empty mind) はよくない (p. 21)」と述べ、先入観があっても、それにとらわれないことが重要で、実地調査前に理論に触れることは避けられないし、必要だと論じております。近年、経営学では先入観にとらわれて仮説検証に向かわないように自分をコントロールしながら事前に具体理論、公式理論を問わず、既存理論に触れ、その後実地調査に臨むのがいいという方向に議論が収まりつつあります⁶。

さて、事前にどのような文献を読むかという点で若干曖昧さがあるGlaser (1978; 1992) ですが、文献の何に注目して読むかということに関する主張は一貫しております。それは文献の「様式」に注目して読むということです。この様式には二つの要素が含まれていて、一つは、データから生み出されたコードを理論的に関連付けるために使う概念モデルです。この概念モデルのことをグラウンデッドセオリーアプローチでは理論的コード (Theoretical codes) と呼んでおります。図2の様なよく目にする原因と結果の関係性も理論的コードの一つです。他にも社会学では代表的な理論的コードである原因 (Causes)、環境 (Contexts)、コンティンジェンシー (Contingencies)、結果 (Consequences)、共分散 (Covariances)、状況 (Conditions) からなる「The six C's」もあります。Glaser (1978) の第四章では、これらを含む18個の代表的な理論的コードを紹介しております。

グラウンデッドセオリーアプローチを行う研究者によくありがちな失敗としては、研究対象に対してものすごい量の情報を持ち、ディテールに関しても非常によく知っているのですが、それを理論へと結びつけられないというものです。この失敗は、理論を知らないからではなく、

⁶ 2004年から2007年にかけてAcademy of Management Journalの冒頭の論評「From the editors」で、著名な定性研究学者がグラウンデッドセオリーアプローチやケース・スタディに関する様々なテーマについて論じている。

図2：理論的コードの一例



Glaser (1978) 図10 (p.75) を和訳

データをどのようにカテゴリー化し、それを学術的な枠組みに配置するか知らないために起こってしまうのです。理論的コードという概念同士の関係性に関する枠組みが頭の中に多くあることで、そういった失敗を避けられるのです。注意点としては、Glaser (1978; 1992) は、飼いならした一つの理論的コードを念頭においてデータ収集・分析してしまうとデータを理論の型に当てはめ新しい理論が発見できなくなってしまうといいます。それを避けるには、膨大な数の理論的コードを事前に文献を通じて知っておく必要があるということです。もう一つの様式は、自分が出版を目指しているジャーナルのお手本になるような論文や、自分が博士論文を執筆しているならば規範となるような博士論文で使われている言葉遣い、求められている質の高さなどです。こうした文献の「様式」に着目して読むことで理論的感受性が高められるようになるということです。

実地調査終盤から実地調査後にかけて

グラウンデッドセオリーアプローチにおいて、実地調査で収集したデータを分析し、そこから浮かび上がった仮説を、さらに追加されたデータで裏付けていくことを繰り返すおこなうというプロセスを追っていきます。それを継続することで、理論がデータによって反証されない点、これを理論飽和点といいます。それがいつか来ることになります。ここまで来ると研究者の中で自分が生み出した理論に対する自信が生まれます。この状態にいたると理論が既存理論に引っ張られてしまうということが避けられるのです。ここで初めて具体的領域に関係する専門的な文献を読み、概念の精緻化や、データから産出した理論は何が新しいのか、またはどの研究分野に位置づけられるのかを検討していきます。

もし自分が発見した理論に関する既存文献がほとんどない、あるいは記述的な文献しかなかった場合、研究者は *Awareness of Dying* (1965) のように新しい研究分野を開拓することになります。しかし現実的にはこういった金脈を発見することは非常にまれで、蓋を開けてみたらすでに既存研究が膨大にあり失望するということが頻繁にあります。しかしまだ望みを捨てることはありません。Glaser (1992) によると既存文献の量が多少ある程度ならば、新しい構成概念や、関係性を発見したりして理論の延長を図れたり、既存理論のずれを修正したりし理論への貢献を果たすことが可能だと述べております。

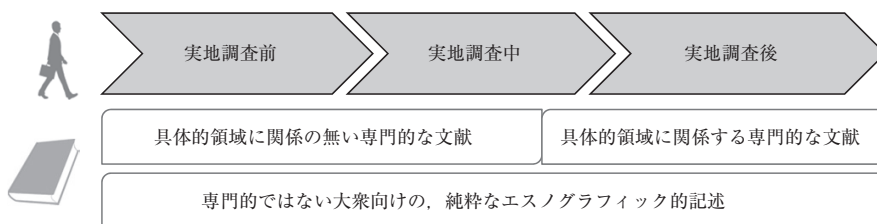
しかしながら、自分が発見した理論と既存文献を比較したら、理論に関係する研究がしつこくされている場合はどうしたらよいのでしょうか。経営学ならばモチベーション理論などの研究がその類になるでしょう。これこそがグラウンデッドセオリーアプローチを選ぶにあたり、研究者が認識しておかなければいけない大きなリスクの一つなのです。しかし、その場合におい

でもGlaser (1992) は、まだ理論への貢献は可能だと論じます。確かにすでに飽和状態に達した研究分野において新しい構成概念や関係性を発見することは困難ではあるのですが、必要以上に細分化されてしまっている研究分野を統合、整理、合成することが可能だといえます。これによって良い理論の条件である範囲 (Scope) と簡索性 (Parsimony) を満たすことができる⁷、つまり広い範囲の現象や出来事を、簡潔な文章で説明するということで理論に貢献ができるのです。

すべての段階において

調査プロセスのすべての段階において、専門的ではない大衆向けの、純粋なエスノグラフィック的記述を読むことが推奨されております。これには例えば人類学、伝記文学、日記、論評、記録、レポート、カタログ等の概念が含まれない、もしくは最小限にとどめられた現象がそのまま記述された文献が含まれます。これらの文献は、仮説を裏付けるデータとして使うことができますといえます。グラウンデッドセオリーアプローチはデータから浮かび上がってきた仮説を、さらに収集したデータと比較することで、仮説がいかなるデータによっても反証されない点までもっていくのですが、このデータは実地調査中に集めたデータだけではなくこうした他の研究者や、ジャーナリスト、ましてや日常生活で触れた会話などすべてのものが仮説と比較するデータとして使えるというのがグラウンデッドセオリーアプローチの大きな特徴のひとつです (詳しくはこの回以降で説明します)。図3は調査プロセスと読むべき文献の種類を表したものです。

図3：調査プロセスと文献の種類



Glaser (1992) の第6章を基に筆者作成

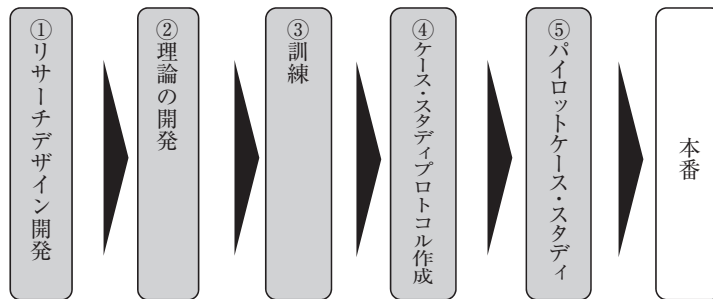
4.3 Yin：実地調査前に入念な準備が必要

実験心理学の背景を持ち、伝統的な科学的厳密性と手続きを重んじるYinは、グラウンデッドセオリーアプローチを「指針がないことは人を惑わせる」、「学生がケース・スタディを選べば (文献研究をせずに) すぐ実地調査にいてもいいと勘違いさせる」、「研究分野や理論を理解しないと現地で関連する人とコンタクトを取れない」(Yin, 2013, p. 37) と批判し⁸、ケース・スタディの目的が理論の産出、実証を問わず実地調査本番前に入念な準備が必要だと主張します (図4)。これから各ステップに関して解説していきます。

⁷ 範囲と簡索性についてはAkers (2013, pp. 6-7) が詳しい。

⁸ Yin (2018) 第六版になると、グラウンデッドセオリーアプローチを名指した批判はなくなるものの、準備なしに実地調査に臨むことへの批判は変わらない。

図4：実地調査本番までのプロセス



Yin (2018) を基に筆者作成

① リサーチデザインの開発

事前に準備するものの中でも、特に重要なのはリサーチデザインです。これを開発しておくことで、効率的に必要な情報を収集、分析することができるようになります。リサーチデザインは以下の五要素で構成されます (Yin, 2018, p. 27)。

リサーチデザインを構成する要素

1. リサーチクエスチョン
2. (もしあれば) 命題
3. 分析単位
4. データを命題に結びつけるロジック
5. ケース・スタディの調査結果の強度を解釈する基準

リサーチクエスチョンは、学術論文において最後に答えなければいけない質問です。ケース・スタディは「どのように」と「なぜ」から始まる質問に対して答えを出すことに適していますので、そうしたリサーチクエスチョンを実地調査前に設定する必要があります。

Yin (1984) は、リサーチクエスチョンに加えて、命題⁹を設定することで実地調査中にどのようなデータをどこから収集すればよいのかより明らかになるといいます。一方で研究対象に関する既存文献が少なかったり、リサーチクエスチョン自体が探索的であったりする場合は、命題を事前に設定できないことがあります。その場合であっても、探索研究が成功したか否かという基準を決めておく必要があります (Yin, 2018, p. 28)。例えば、探索研究を終えたときに、明確な研究目的や命題が発見できたかといった基準です。

さらに分析単位を考えておく必要があります。比較的明確な単位としては個人、小集団、組織、パートナーシップがあります。一方で曖昧な単位として、コミュニティ、関係性、意思決定、プロジェクトがあります (ケースの単位についてはこの回以降で詳しく説明します)。

⁹ 命題とは、「AならばBである」といった真偽が確かめられる文章のことです。例えば、「知識の送り手と受け手との間のコミュニケーションが促進されると学習成果が高くなる」といった文章です。これが、実証するために定量化できる概念まで落とし込んだ文章を仮説といいます (そしてこの作業を操作化といいます)。先ほどの命題を仮説へ変換すると、「過去半年間に教員と学生との間のコミュニケーションの頻度が多ければ、学生のGPAが上がる」といった具合です。命題が、数値で測れるレベルになったのが理解できると思います。したがって命題は仮説より抽象度の高い文章ということになります。

次に、データを命題に結びつけるロジックを考えておく必要があります。データを収集していくと、問題になってくるのがデータによってどのように命題が正しいか否かを判断するかということです。これは、後程データ分析の回で詳しく解説しますが、定性データを命題に結び付ける分析手法としてパターン適合、説明構築、時系列分析、論理モデル、そしてクロスケース統合があります。これらからどの手法で分析するのか事前に決めておくことでデータ収集の指針が定まり、調査後データが足りなかった、あるいは不必要なデータを収集してしまったという失敗を避けることにつながります。例えば、イノベーションの内部普及と組織構造変革に関する調査を行う際、収集したデータを時系列分析しようと事前に考えておくだけで、インタビューの際に新しいイノベーションが導入された年月日とその時に起こった組織構造の変革について時系列的に段階を追って聞いていけば、効率よくデータを収集することが可能になる訳です。

最後に、ケース・スタディの調査結果の強度を解釈する基準を考えておく必要があります。統計調査において、P値が5%未満 ($p < 0.05$) であれば、データに「統計学的有意差がある」というように調査結果の強度を測ることができます。一方、定性研究の場合データの性質上、統計的分析に頼った解釈をすることができません。したがってどのように調査結果の強度を測ればいいかという問題がでてきます。これに対し、Yinは、ケース・スタディにおいて調査結果に対抗する理論 (Rival Theory) をできるだけ事前に文献から提示しておき、それらを棄却することで、調査結果の強化が図れると論じます。

すこしわかりにくいので、同じ統計的な基準で仮説の強度を測れないものとして、恐竜はなぜ絶滅したかという古生物学的な質問を例にとって説明します。これらの質問に対して巨大隕石衝突説などいくつかの競合している仮説があることはご存知だと思います。研究者がもし恐竜は絶滅したのではなく、鳥類に進化したという仮説を証明しようとするならば、この仮説を支持する証拠を集める必要があります。並行して対抗仮説、つまりこの例えでいうと巨大隕石衝突説、大火山説、地軸変動説などその他もろもろの仮説を棄却する証拠も集める必要があります。こうして自分の仮説を証拠によって支持し、対抗仮説を棄却することで、自分の仮説の強化が図れるのです。そのためのデータ収集の計画を事前に考えておかなければいけないということです。

② 理論の開発

Yinは、リサーチデザインを考えることは、予備的な理論 (Preliminary theory) の開発につながるということです。予備的な理論とは、調査結果を事前に予測したシンプルな文章のことです。Yinによると、この予備的な理論は教科書に載っているような一般的なもののことではなく、研究者が調査の大まかな設計図を描くのに必要なシンプルな文章だと述べます。Yinが予備の理論としてマネジメントインフォメーションシステム (MIS) の導入に関する研究において提示したものを紹介します (Yin (2018, p. 35)).

予備的な理論

このケース・スタディは、なぜ古い組織構造に単に上書きするように新しいMISを導入するよりも、組織構造自体を編成しなおしたほうが成功することを提示する。

理論の開発においても一つ重要なのが、予備的な理論に対抗する理論を考えておくことです。先ほどのMISの例でいうと、導入の際、従業員の抵抗が大きな問題になり、そういった抵抗勢力の排除が成功につながると言うことが主に文献で議論されておりました。したがって以下のような対抗理論も用意しておきますYin (2018, p. 35).

対抗理論

このケース・スタディは、同時に、なぜ単に鍵となる人材を入れ替えただけでは導入成功には十分ではないことを提示する。

こうした予備的な理論と対抗理論を事前に考えておくと、リサーチを改善することにもつながります。そういった意味では、この二つのステップを行き来することで双方が強化されていくのです。ただ、この予備的な理論は、そう簡単には思いつくものではありません。それには研究テーマに関連する多くの文献を読み、同僚や指導教官と研究テーマについて検討を繰り返さなければいけません。Yinはこうした予備的な理論は、ドラッカーなど巨匠の著書で提示されたまだ実証されていない段階で止まっている記述などから発想を得ることがあるといいます。また、予備的な理論を開発するときには、個人、グループ、組織のどのレベルの話をしているのかという、分析単位のことこの時点で考えておく必要があります。

③ データ収集前の準備と訓練

Yinの提案するケース・スタディアプローチを読んでいると、チームで調査を行うことを前提にしていることがわかります。ケース・スタディにおいてデータを収集することは、サー

図5：データ収集前に行う準備訓練の内容

【事前読書】 ケース・スタディプロポーザルの原案。もしあったら、実地調査に関する方法論の教科書、調査対象に関するいくつかの著書、過去のケース・スタディ調査結果のレポートや出版物など手本となるようなケース・スタディ。

【議題1】 ケース・スタディの目的、主なりサーチクエスション、ケース選定について議論

【議題2】 ケース・スタディプロトコルの検討

- A) 関連する理論的フレームワークと文献
- B) 仮説的論理モデルの構築、または検討（必要に応じて）
- C) プロトコルのテーマについての徹底した検討（テーマの重要性和各テーマに関して収集できる証拠の種類）
- D) 最終的なケース・スタディレポートによってカバーされることが想定されるテーマ（研究の最終的な成果物について事前に想定できる）

【議題3】 方法論の検討

- A) 情報提供者へコンタクトの手配（確認書やメールの文案作成）
- B) 実地調査の手続き（方法論的原則の検討）
- C) 証拠の使用（証拠の種類と複数のデータを収斂する必要性の検討）
- D) ノート取りとその他の実地調査の練習
- E) 実地調査後の活動（お礼メールの文案作成）
- F) 締め切りを含む学習のスケジュール

ベイとは違い多くの時間と労力を要します。チームで調査を行うことが効率面においても、また相互にチェックしあうことでバイアスを避けられるという面においても多くの利点があるのです。一方、チームで調査をおこなう際に、メンバー全員の知識と能力が高いレベルにおける平準化が求められます。そのために、一週間ほどのゼミ形式の準備・訓練が必要になります。図5がその際の主な議題です。最終的にはすべてのメンバーが、ケース・スタディをする理由、どの証拠を収集するか、どのような不測の事態が想定されるか（またそれが起こった時の対処）、どのような証拠が命題を支持あるいは、棄却するのかをチームメンバー全員がしっかりと理解しておくことが求められます。

④ ケース・スタディプロトコルの作成

Yinのアプローチは科学的実験のロジックに基づいているということは、冒頭でも書きました。実験を行うにあたり、実験ノートというものが非常に重要になります。実験ノートは、自分が行った実験の手順や実施された状況を詳細に記述したもので、実験結果の再現に重要な役割を果たすのです。Yinのアプローチにおいて、実験ノートにあたるのが、ケース・スタディプロトコルと呼ばれるものです。ケース・スタディプロトコルとは、事例研究のデータ収集にあたり指針となる研究者のための調査手順書で、これを实地調査前に作成しておく必要があります。これがあることにより、調査結果の再現が可能になるとともに、研究チームメンバー全員が効率的にデータ収集に当たることができるのです。それ以外にも研究者が、調査中に調査のテーマからずれていってしまうことを防ぐ、实地調査中に起こりうる問題を事前に予測する、読者を特定しておくことで成果物が読者のニーズと合わないという状況を防ぐなど、プロトコルを作成することは多くの利点があります。

ケース・スタディプロトコルの構成

ケース・スタディプロトコルは、以下のAからDまでの4つのセクションから構成されます(Yin, 1984)。

- セクションA：ケース・スタディプロジェクトの概要
- セクションB：データ収集の手続き
- セクションC：データ収集の質問
- セクションD：ケース・スタディレポートの暫定的なアウトライン

セクションA：ケース・スタディプロジェクトの概要

このセクションでは、①研究プロジェクトの背景、②調査の概要、そして③調査に関係する文献、④ケース・スタディプロトコルの役割を記載します。まずプロジェクトについて、研究の重要な利害関係者である論文の審査員や、調査の出資者・後援者向けに研究目的や使命を記述します。また、既存研究との関連や、ケース・スタディレポートの構成、そして調査スケジュールを記載します。次に研究目的、出資者、調査の共同研究者を含む調査概要について書きます。この概要部分の多くは、ケースを選ぶ論理的根拠、検討される仮説、命題、理論、実務との関連性などケース・スタディの中核的問題について多くのスペースを割きます。次に関連する文献をすべて記載し、特に重要な文献に関しては共同研究者全員がすぐにわかる状況にしておく

必要があります。最後に、このケース・スタディプロトコルの役割について記述します。つまりこのプロトコルは、実地調査中に研究者が質問を行う際の指針となる自分への手順書であるということを記載します。

セクションB：データ収集の手続き

このセクションでは、実地調査を行うにあたり、コンタクトをとる人の名前や誰またはどこからどのような証拠（インタビュー、観察、資料）を得る予定なのか、などデータ収集に必要な活動について記載します。これら以外にも実地調査中の手続きや起こりうる不測の事態を事前に考え、それにどのように対応するかなどを記載します。以下Yinがこのセクションに記載する主な内容として挙げている項目です (Yin, 2018, pp. 98-99)。

- ケースとなる主な組織や情報提供者へのアクセスを取る方法
- 実地調査中に必要なリソース：パソコン、筆記用具、紙、クリップ、静かでプライバシーが確保された場所
- 必要な時に、他のメンバーや同僚から支援や助言を求めるための手続き
- 期間内にデータ収集活動を完了させるまでの明確なスケジュール
- 情報提供者の都合が変わった、あるいは実地調査中の研究者の気分やモチベーションが変化したなどの不測の事態への対応の仕方

さらにここでは、情報提供者を保護するための手続きを記述します。まず大学等の研究倫理審査委員会によって承認された実地調査の手続きを記載し、情報提供者からインフォームドコンセントを得るための文言や、または情報提供者に対して調査に参加するにあたり負わなければならないリスクや条件などの文言をメンバー全員が使用できるようにスクリプトを用意し記述します。

セクションC：データ収集の質問

このセクションでは、データ収集の際の質問を記載します。Yinは、ケース・スタディで扱われる質問の種類には次の5つのレベルがあると述べております (Yin, 2018, p. 100)。

レベル①	特定の回答者に対して声に出してする質問
レベル②	個別のケースに関する質問、調査を進めるための自分に向けた質問
レベル③	複数のケースにまたがる調査結果のパターンについての質問
レベル④	研究全体についての質問、ケース・スタディから得られた証拠の範囲を超えた他の文献や公開データを含む情報を使う必要がある
レベル⑤	狭い研究の範囲を超えた政策的提言と結論に関する規範的な質問

Yinはプロトコルで扱う質問は、レベル②と限定したうえで、他のレベルと混同しないように注意を促します。特にレベル①とレベル②は混同しやすいといいます。プロトコルに用意する質問は情報提供者に対して読み上げるものではなく、インタビュー中、自分はどのような質問を投げかけ、どのようなデータを収集しなければいけないかという自分自身の指針となるも

のです。またレベル③, ④, ⑤はプロトコルの扱う範囲ではありません。プロトコルは複数ケースであっても、個別のケースでデータを収集するために作られたもので、研究全体の質問に答えるために作られるものではないのです。

このセクションには、レベル②の質問のリストとともに表の外形 (Empty table shells) を提示しておきます。これは、図6に提示してあるような、行名と列名はラベルが表記されているが、他のすべてのセルは空白になっている表のことです。これを事前に作っておくことで、どのようなデータを収集すればよいか、また収集し忘れたデータなどが一目で理解できるといいます。

図6：表の外形

	A	B	C	D	←行名
1					←空白セル
2					
3					
↑ 列名					

筆者作成

Yinは表の外形に関してMiles and Huberman (1994)を参考にするようにと述べ、詳しく説明しておりません。同著書の第三版であるMiles, Huberman, and Saldana (2013)から代表的な表の外形を、次の例をつかって説明します。例えばリサーチクエスションとして、ドイツにおけるインダストリー 4.0政策が、組織にどのような影響を与えているかというものを設定します。文献からインダストリー 4.0政策を構成する代表的な三要素として「自動化」「デジタル化」「相互運用性」が文献から抽出できたとします。またこれらの要素が組織の「リーダーシップ」「手段」「プロセス」への影響を調査すると設計します。これらの情報から図7のような表の外形を作ることができます。ここではインダストリー 4.0の要素を列に、組織の要素を行に置いておりますが、その際、表の空白部分が収集すべき情報となります。この表をすべて埋めることによって、リサーチクエスションの答えを構成するデータを得ることが可能になるのです。また、どのデータを収集したのか、まだしていないのかを一目で把握することができます。

図7：表の外形 (例)

	リーダーシップ	手段	プロセス
自動化			
デジタル化			
相互運用性			

筆者作成

セクションD：ケース・スタディレポートの暫定的なアウトライン

ケース・スタディレポートとは、ケース・スタディの最終的な成果物です。公表するための媒体が、学術雑誌であればジャーナル論文であり、修士・博士課程のプロジェクトであれば修士・博士論文、また企業から依頼されたものならば報告書になります。このセクションにこのケース・スタディレポートの読者、アウトライン、構成を事前に考え記載します。Yinは、これを怠ると、のちに様々な問題がおけると述べております。ケース・スタディレポートの読者（例えば、大学の同僚、政策立案者／実務家／コミュニティのリーダー、修士・博士論文審査委員、調査のスポンサー）を事前に把握しておくことや、その読者に向けたレポートの形式を考え、プロトコルに記しておくことで、関連するデータを効率よく収集したりできる一方で、データを再収集したり、レポート自体を書き直さなければいけないリスクを軽減できます。ジャーナルにケース・スタディ論文を投稿するのであれば、出版したいジャーナルのケース論文をいくつか読み、どのような形式で、どれほどの質が求められているのかを事前に理解しておくとういいます。

⑤ パイロットケース・スタディ

実地調査前の最後に行うのがパイロットケース・スタディです。これは本番と比較するとデータ収集計画ははるかに緩い、また焦点もあまり定まっていない段階で実行することができます。これを行うことで、命題や予備的な理論を修正でき、リサーチデザインをより最終的な形に近づけていくことができます。さらにどの情報をどうやって収集するかという手続きや、メンバーの誰がどのデータを集めるといったことも事前に調整する機会を得ることができます。他にもパイロットケース・スタディを行うことでインタビューに必要な時間を知ることができるし、質問が情報提供者に伝わらなかったりしたらそれを見直すことや、倫理的な問題に気づかせてくれたりもします。

パイロットケースは、組織に知人がいる、アクセスの良さ、地理的な近さなどの利便性から選ぶことができます。協力者が知人であった場合、気軽に長期的な付き合いになることがあります。その場合、試験的に現象を違った角度から観察したり、様々なアプローチを試したりすることが可能になります。パイロットケースの参加者は、フィードバックを求めてくる場合があります。そういった場合は、ケース・スタディプロトコルをこの協力者の求めに応じて一部を修正、追加する必要があります。

パイロットケース・スタディを終えたら、簡単なメモ形式でよいのでレポートとしてまとめます。この際、本番のケースレポートと異なるのが、研究対象について書くのと同時に、リサーチデザインを改善するための情報も記載することです。このレポートを基にさらに研究チームで検討し、リサーチデザインやケース・スタディプロトコルを最終形に近づけていくのです。こうしてここまで綿密な準備を行ったうえで、初めて本番のケースに入っていくことができるのです。

4.4 まとめ

最初の比較ポイントであった「データ収集前の文献調査と先行理論の必要性」について、Glaser and Strauss (1967) とYin (1984) の違いを考察してきました。表1は両者の主張を比較し、違いをまとめたものです。

表1:「データ収集前の文献調査と先行理論の必要性」比較まとめ

	Glaser and Strauss (1967)	Yin (1984)
実地調査前の文献調査	研究の具体的領域に関係する専門的な文献は理論的感受性を鈍らせてしまうために原則として読まないようにする。様式に着目して文献を読むようにする。	綿密な関連分野の文献調査をし、リサーチデザイン、理論の開発を行う必要がある。
リサーチデザイン	研究問題、リサーチクエスションはデータ収集の前に一切設定するべきではない。実地調査中に継続的にデータ収集と分析を行き来することから出現する。	以下の五要素から構成されるリサーチデザインを開発する。1) リサーチクエスション、2) 命題、3) 分析単位、4) データを命題に結びつける論理、5) ケース・スタディの調査結果の強度を解釈する基準。
理論開発	行わない。むしろ頭を理論から解放し実地調査に臨む。	予備的な理論の開発と対抗理論を既存文献から開発しておく。
訓練	言及無し	一週間程度のゼミ形式で議論を行う。ここでは知識の共有や、ケース・スタディプロトコルの作成などをチームで行う。
ケース・スタディ プロトコルの開発	言及無し	必要
パイロットケース・スタディ	言及無し	リサーチデザインの改善と調査中に起こりうる潜在的課題を顕在化するために行う。

筆者作成

4.5 おわりに

本稿では、「データ収集前の文献調査と先行理論の必要性」というポイントについて、Glaser and Strauss (1967) と Yin (1984) の二つのアプローチを比較しました。Yinは、入念な準備と訓練をしてから本番の実地調査に臨むアプローチです。このアプローチは、データ収集前に文献調査、仮説構築をしないグラウンデッドセオリーアプローチとは大きく異なることが見てとることができます。グラウンデッドセオリーアプローチは、例えるならば、まったく水泳に関する知識も経験もない人が、泳ぎを覚えるために、クロールや平泳ぎなどの既存の泳ぎの型を学習せずにいきなり大海に繰り出していくアプローチです。もちろんおぼれてしまうリスクもあるのですが、一生懸命もがいているうちに、今までの水泳の型には当てはまらない独自でありながら有効的な泳ぎ型を発見する可能性があります。一方Yinのアプローチは、まずは泳ぎの型をしっかりと教科書から学び、どの泳ぎの型で泳ぐのか選び、プールで練習を積んでから最後に大海に繰り出します。このアプローチは、教科書から学んだ型から入ってしまった分、新しく効率的な泳ぎの型を見つける可能性は低くなりますが、おぼれてしまうリスクは低くなります。この様に、二つのアプローチには、両方に利点とリスクがあり、それをじっくりと精査したうえでどちらを選ぶのかを決めなければいけません。その議論は、シリーズ後半に取っておくことにしましょう。今回は、「ケース・スタディプロトコルの作成の仕方」について、具体例を提示しながら解説をしていきます。

参 考 文 献

- Akers, R. L. (2013). *Criminological Theories: Introduction and Evaluation*: Taylor & Francis.
- Charmaz, K. (2006). *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide through Qualitative Analysis*: SAGE Publications.
- Eisenhardt, K. M. (1989). Building Theories from Case Study Research. *The Academy of Management Review*, 14(4), 532-550.
- Glaser, B. G. (1978). *Theoretical sensitivity: Advances in the methodology of grounded theory*: Sociology Press.
- Glaser, B. G. (1992). *Basics of grounded theory analysis: Emergence vs forcing*: Sociology press.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1965). *Awareness Of Dying*: Weidenfeld & Nicolson.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*: Aldine.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1988). 「死のアウェアネス理論」と看護：死の認識と終末期ケア (木下康仁, Trans.) : 医学書院.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1996). データ対話型理論の発見― 調査からいかに理論をうみだすか (後藤 隆, 大出春江, & 水野節夫, Trans.) . 東京 : 新曜社.
- Miles, M. B., & Huberman, A. M. (1994). *Qualitative data analysis: An expanded sourcebook*: Sage.
- Miles, M. B., Huberman, A. M., & Saldana, J. (2013). *Qualitative Data Analysis: A methods sourcebook* (3rd ed.) : SAGE Publications.
- Siggelkow, N. (2007). Persuasion With Case Studies. *Academy of Management Journal*, 50(1), 20-24.
- Suddaby, R. (2006). From the Editors: What Grounded Theory is Not. *Academy of Management Journal*, 49(4), 633-642.
- Yin, R. K. (1969). Looking at upside-down faces. *Journal of Experimental Psychology*, 81(1), 141-145.
- Yin, R. K. (1970). Face recognition by brain-injured patients: A dissociable ability? *Neuropsychologia*, 8 (4), 395-402.
- Yin, R. K. (1972). *Participant-Observation and the Development of Urban Neighborhood Policy*. Retrieved from <https://www.rand.org/pubs/reports/R0962.html>
- Yin, R. K. (1981a). The Case Study as a Serious Research Strategy. *Knowledge*, 3(1), 97-114.
- Yin, R. K. (1981b). The Case Study Crisis: Some Answers. *Administrative Science Quarterly*, 26(1), 58-65.
- Yin, R. K. (1981c). Life Histories of Innovations: How New Practices Become Routinized. *Public Administration Review*, 41(1), 21-28.
- Yin, R. K. (1984). *Case study research: Design and methods*: Sage Publications.
- Yin, R. K. (2011). ケース・スタディの方法 (近藤公彦, Trans. 2nd ed.) : 千倉書房.
- Yin, R. K. (2013). *Case Study Research: Design and Methods* (5th ed.) : Sage Publications.
- Yin, R. K. (2018). *Case study research and applications: Design and methods*: Sage publications.
- Yin, R. K., & Gwaltney, M. K. (1981). Knowledge Utilization as a Networking Process. *Knowledge*, 2(4), 555-580.
- Yin, R. K., & Heald, K. A. (1975). Using the Case Survey Method to Analyze Policy Studies. *Administrative Science Quarterly*, 20(3), 371-381.

[よこざわ こうどう 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院准教授]

[2019年9月19日受理]